大好物

4月2日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

4月2日のおはなし「大好物」

　寒い日が数日続いて、不意にあったかくなった日だった。仕事仲間と飲みに行って、ビールに熱燗にホッピーに焼酎に、と調子に乗って飲んでいたら終電になった。降りるべき駅を数駅寝過ごして、それでも割とあったかいのでぶらりぶらりと家をめざして歩き始めた。間もなく最寄り駅と言うところでなんともいい香りがして来た。どこかの誰かの家の庭から張り出した木の枝に季節外れの花が咲いている。ふいっとひとつ摘んで香りを嗅ぐ。えも言われぬとはよく言った。などと意味があるようなないようなことを呟きながら胸ポケットに明るい色の花をしまう。

　見覚えのある街にさしかかり家路をたどる。ふらふら夜道を歩いていると、いきなり足元をかすめて何かが通り過ぎ、あやうくひっくり返りそうになる。ネコだろうかと思ったらそれがいきなり宙に舞い上がり、こっちにめがけて突進して来るのでとうとう本当にひっくり返ってしまった。ひっくり返ったのは酔っぱらっているせいもあるだろうが、素面でも尻餅をついたかもしれない。こんなにいきなり突っ込んで来られては酔っていなくても避けようがない。ようやく突っ込んで来た相手の正体がわかる。ひらひら不安的に宙をジグザグに切るその飛び方を見てコウモリだろうと見当がつく。

　おれに何の恨みがある。尻餅をついたまま見上げているとコウモリはひらりと舞い降りて俺の前に人の形をして立ちはだかった。それでおれにはこれが夢だとわかった。夢なら別にちょっとくらい転んだって構わない。人の形になったコウモリはすたすたと歩み寄ってきて、おれに手を差し伸べた。おれは驚いた。すでに尻餅をついているのに、その上さらに腰を抜かすくらい驚いた。

　手を差し伸べてきた女はびっくりするくらい綺麗だったが、夢の中ならそんなこともあるだろう。おれが驚いたのはそんなことではない。女の手がだいたいおれの身長と同じくらいあったからだ。女はざっと見積って背丈が（体長と言えばいいんだろうか）15メートルくらいはあろうかと思われた。そんなバカなはずはない。ひらひら舞い降りたコウモリが人の形になったあたりまでは、そんなに大きくはなかったはずだ。ごく人並みの背丈に見えた。

「あわてないの」女が言った。ものすごい大音量の声におれは内臓が全部ひっくりかえるんじゃないかと思った。「わたしはそんなに大きくないわ」
「でかいじゃないか」今度は頭が痛くなるような甲高いきいきい声で誰かが叫んだ。「めちゃくちゃでかくてざっと15メートルは……って、これ、おれの声かよ！」

　誰かの声だと思ったらおれの声だった。聞いたこともないような金属的な高音で、いったいどこから出しているんだ！と、自分で自分にねじ込みたくなるような声だ。それから気づいた。おれは依然として尻餅をついていたが、そこはもう見慣れた道ではなくなっていた。自宅の近所の

、玄関わきに猫の彫像のあるお屋敷の前ではなくなっていた。そこには遥か天高くそびえたつ巨大な建造物が建ち並び、目の前にはだだっぴろい空き地が出現していた。石畳でもなく、コンクリートでもなく、黒々として見たこともない荒くれたでこぼこの地表だった。巨人女の声が轟いた。

「驚いた？　さっきわたしにぶつかったせいね。謝るわ」
「何を？　おまえにぶつかったからどうだって言うんだ。変な世界に連れてきたことか？」
「変な世界？　何よ、変な世界って」
「しらばっくれやがって。じゃあこの声か？　この声がおまえのせいなのか？」
「声？　ええまあ、声も関係なくはないわね」
「ふざけるな！」おれは自分の情けないきいきい声にうんざりしながら、せいぜい大声を張り上げようと努力した。「関係なくはないってなんだ！　謝るなら言い訳するな！」

「ああそうか」大女は一人で勝手に納得すると急にしゃがみ込んだ。おれはつぶされるかと思ったが大丈夫だった。女は左手でおれの両肩をがっしりつかみ、身体の向きを変えた。「これを見て」

　そこにはおれの身体ほどもある巨大な黄色い花があって、強烈な香りを放っていた。さっきおれがどこかで摘んだあの花だった。とたんに、状況が飲み込めた。女が巨大なのではなく、おれが縮んだのだと言うことがこれ以上ないくらいくっきりわかった。おれの足が宙に浮いた。女がおれを持ち上げたのだ。下に落ちたらと思うと気が気じゃない。

　恐ろしく綺麗だが恐ろしく巨大な女の顔の正面まで持ち上げられた。いや、女の顔は恐ろしく巨大に見えるだけで、実際にはそれほど大きくはないのだろう。
「この花の香りを嗅ぐとね、欲しくなるのよ」特大サイズだと思っていた女の唇が開き、大音量だと思っていた声が言った。「だからつい引き寄せられちゃって。大好物で、我慢できないの」

　巨大な唇の赤い色や巨大な歯の白や舌の肉色が目の前で動き回る様子におれは一瞬言葉を失ってしまった。恐怖と淫美さと滑稽さで何とも形容しようのない感覚が下腹の方に膨れ上がり始めた。女が喋ると口の中で柱のように見えたのは糸を引いた唾液だ。巨大な液体の柱が細くなり消えていくのを眺めながら、女が我慢できないのは何なのか、ようやくおれは悟った。

「戻してくれ！」身体が縮んだせいで甲高くなったきいきい声でおれは叫んだ。「元に戻してくれ」
「我慢できないの」ねちょっと唾の音を響かせ妙に色っぽい声で女が繰り返した。「大好物なの。だから許してね」
　女の顔がどんどん近づく。熱風のような吐息に全身が包まれる。巨大な舌先が目の前を横切り

分厚い唇をぬらぬらと濡らしたかと思うと、その唇が上下にぱっくり開きおれはその間に飲み込まれて行く。

（「黄色い花」ordered by キマ沙羅-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い＆お誘い

　Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？　もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブクログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

　「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそこのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

　現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→公開中の作品一覧

　SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「Sudden Fiction Project Guide」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

　ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、Facebookページなどに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

　読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

　10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「急募！お題　この秋Sudden Fiction Project開催します」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！　はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

　こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

大好物

http://p.booklog.jp/book/47482

著者：hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/47482

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/47482

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.